

第七劇場

ワーニャ 伯父さん

公演概要書

チェーホフ戯曲の中でもっとも美しいとされる台詞を持つ「ワーニャ伯父さん」。

2019年に三重県文化会館で初演され、

韓国、金沢、宮崎で上演された作品が、6年ぶりに三重で上演。

永遠に失われてしまった誠実に思いを巡らせる物語が、再び三重に。

■ お問い合わせ・主催

三重県文化会館〔指定管理者：公益財団法人三重県文化振興事業団〕

514-0061 三重県津市一身田上津部田1234

tel: 059-233-1100（事業課・担当：田島）

■ イントロダクション

第七劇場で「ワーニャ伯父さん」を三重と韓国で初演したのが2019年。劇団設立20周年の節目の年であり、ほとんどのひとが知らないところで、新型コロナウイルスの影が忍び寄っていた時期でした。その初演後、世界的なパンデミックが起きました。さまざまな情報が飛び交い、世界が混乱し、日常生活が何度も停止されながらも、少しずつ世界が動き始めた2020年後半、金沢と宮崎で再演されました。

この6年の間、私たちは個人の経験に加えて、コロナ禍に留まらず、社会として多くの変化を経験し、人間の強さと弱さを目の当たりにしてきました。それは今も進行形であり、これからも続くのでしょうか。

初演の公演概要書に、私は以下のような言葉を書きました。

私たち生きているものは、誰一人としてワーニャの涙と無関係ではられません。人ひとりの時間は有限であるという当然の事実は、不安定ながら未来あるソーニャに対照されて、よりはっきりと浮かび上がります。しかし、そのソーニャでさえ、ワーニャと同様に有限であり、ワーニャよりも豊かな人生を送れるとは限りません。それどころか「ワーニャ伯父さん」に登場する人物は皆、ほしいものが得られず、求めているひとから認められていません。その背後で時間だけは刻々と過ぎていきます。これはまさに私たち一人ひとりの物語であり、私たちの社会／世界の物語だと、私は感じています。

この「ひとりの人生の有限」の視点から「ワーニャ伯父さん」を照射することで見えてくるものが重要だと感じる気持ちは今も変わりません。ただ、第七劇場の「ワーニャ伯父さん」が「ソーニャの死」を前提とした演出をふまえると、「犠牲を省みる謙虚さと、省察を行動に変える勇気」の重要性が、今、増してきていると感じています。

ずっと昔から人間はさまざまな省察と行動を繰り返してきました。過ちが起きるたび、犠牲が生まれるたびに、それを省みては是正や変化を起こしてきましたが、過ちや犠牲がなくなることは残念ながらありません。しかし、私たちは常にその犠牲ができるだけ少なくする努力をした方がいいと私は考えます。過去に多くの過ちと犠牲の歴史があるからこそ、その省察を怠ってはいけないと思うのです。

世界と社会が大きく揺さぶられている今こそ、この「永遠に失われた誠実に思いを巡らせる物語」としての「ワーニャ伯父さん」を上演するべきだと感じています。

今回の再演にあたり、前回ではカットした原作登場人物を戻し、アップデート版として上演します。加えて、今回もオーディションを実施し、名古屋市在住の山形龍平さん、桑名市在住の加賀志郎さん、伊勢市在住の西内仁美さん、そしてゲスト俳優らと第七劇場俳優2名の計8名で上演します。

第七劇場の「ワーニャ伯父さん」をきっかけに、有限である自分のこと、自分が消えた後も続くであろう社会と世界とのはかない関係について思いを巡らし、過ちから学び自省すること、犠牲を少しでも減らせるの私たち自身以外にはいないことを感じてもらえたらと切に願っています。

鳴海康平（第七劇場 代表 演出家、Théâtre de Belleville 芸術監督）

■ 作品情報

かわいそうに、伯父さん、 幸せがどんなものか わからなかったんだよね

立ち止まってしまったとき、
残された時間は長くはないと気づく。
遠くにかすむ過ぎ去った時間を振り返りながら、
使い古した靴で、その男はまた歩きはじめる。
乾いた足下をながめながら。

第七劇場

ワーニャ伯父さん

原作：A. チェーホフ
構成・演出・美術：鳴海康平

出演：木母千尋、菊原真結
/ 諏訪七海、桑折 現、梶田航平
/ 山形龍平、西内仁美、加賀志郎

舞台監督：北方こだち
照明：島田雄峰（LST）
音響：平岡希樹（現場サイド）
アダプテーション：鳴海康平
フライヤーレイアウト：橋本デザイン室

主催：三重県文化会館
[指定管理者：公益財団法人三重県文化振興事業団]
助成：公益財団法人岡田文化財団、文化庁文化芸術振興
費補助金〔劇場・音楽堂等機能強化推進事業（地域の中
核劇場・音楽堂等活性化事業）〕 | 独立行政法人日本芸
術文化振興会
製作：合同会社 第七劇場

ワーニャ伯父さん

1899年にモスクワ芸術座で初演されたチェーホフ四大戯曲のひとつ。大学教授夫妻が前妻が残した領地を訪れ、立ち去るまでの物語。人生の半分以上を姪ソーニャとともに領地を管理し、教授に奉仕してきたワーニャは、教授への失望とともに自分の人生の浪費に絶望する。そのワーニャを慰めるソーニャの言葉は、チェーホフ戯曲の中でもっとも美しい台詞として知られる。

■ 公演概要

開演日時：

2025年
10月4日（土）14:00 / 18:00
10月5日（日）14:00

※受付開始は開演の45分前、開場は30分前
※整理番号順でのご入場
※各回終演後、トークセッションを実施
※10月5日（日）14:00の回のみ託児サービスあり（先着
順・有料）。公演の2週間前までに三重県文化会館へお問い
合わせください。

料金：※整理番号付き自由席

一般 3,000円（当日 3,500円）
22歳以下 1,000円（前売・当日ともに）

※未就学児入場不可。
※22歳以下チケットでご入場の際は、年齢の確認できる証明
書のご提示をお願いいたします。

チケット取扱：※8月2日（土）10時より発売開始

三重県文化会館
▶チケットカウンター（窓口・電話）
TEL：059-233-1122（10:00～17:00）
※月曜または月祝翌平日休館
▶WEBチケットサービス「エムズネット」
<https://p-ticket.jp/center-mie/>
第七劇場
▶WEB（予約のみ）
<https://www.quartet-online.net/ticket/vania25>

会場：

三重県文化会館 小ホール
〒514-0061 三重県津市一身田上津部田1234
・近鉄名古屋線・JR紀勢本線・伊勢鉄道「津駅」
西口より徒歩約25分／三重交通バス約5分
・伊勢自動車道「津IC」より車で約10分
／「芸濃IC」より車で約15分

お問い合わせ：

三重県文化会館 チケットカウンター
TEL：059-233-1122（10:00～17:00）
※月曜または月祝翌平日休館

■ 関連企画

「ワーニャ伯父さん」を読んでみよう！

チェーホフの名作「ワーニャ伯父さん」を解説付きで、みんなで読んでみませんか？ ナビゲーターは第七劇場・演出家、鳴海康平。

日時：2025年9月13日（土）14:00～16:30

会場：三重県総合文化センター

生涯学習センター棟 2F まなびラボ

料金：1,000円

ナビゲーター：鳴海康平（第七劇場 代表 演出家）

申込：三重県文化会館

tel. 059-233-1122

web. <https://www.center-mie.or.jp/bunka/>

窓口. 三重県文化会館チケットカウンター

（10:00～17:00、月曜休館・祝日の場合翌平日休館）

■ プロフィール

■ 鳴海康平

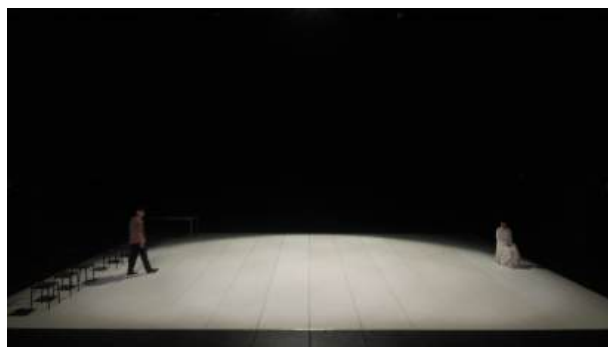


写真 ©松原豊

第七劇場、代表・演出家。Théâtre de Belleville、芸術監督。1979年北海道紋別市生まれ。三重県津市在住。早稲田大学在籍中の1999年に劇団を設立。これまで国内25都市、海外5ヶ国（フランス、ドイツ、ポーランド、韓国、台湾）11都市で作品を上演。ポーラ美術振興財団在外研修員（2012年・フランス）。帰国後、2014年に東京から三重県津市美里町に拠点を移設。愛知県芸術劇場主催AAF戯曲賞審査員（2015～2022年）。名古屋芸術大学・舞台芸術領域准教授（2021～2025年）。京都芸術大学・舞台芸術学科非常勤講師（2025年）。

■ 第七劇場

1999年、演出家・鳴海康平を中心に設立。主に既成戯曲を上演し、言葉の物語のみに頼らず舞台美術や俳優の身体とともに多層的に作用する空間的なドラマが評価される。国内外のフェスティバルなどに招待され、これまで国内25都市、海外5ヶ国11都市（フランス・ドイツ・韓国・台湾・ポーランド）で作品を上演。代表・鳴海がポーラ美術振興財団在外研修員（フランス・2012年）として1年間滞仏後、2013年に日仏協働作品『三人姉妹』を新国立劇場にて上演。2014年、東京から三重県津市美里町に拠点を移設し、倉庫を改装した文化拠点Théâtre de Bellevilleのレジデントカンパニーとなる。
<https://dainanagekijo.org>



写真：「ワーニャ伯父さん」（三重県文化会館・2019）

■ アントン・チェーホフ（1860 - 1904）



ロシアの作家、医師。小説においても戯曲においても革新的なスタイルで作品を残す。それまでの大きな物語や主人公のような存在に重きをおかず、人間に対するすぐれた描写と緻密な構造を用い、リアリズムにおける近代劇の基礎をつくった

モスクワ芸術座の創成期に戯曲を書き下ろした。「かもめ」「ワーニャ伯父さん」「三人姉妹」「桜の園」は四大戯曲と呼ばれ、現在も世界中で上演され続けている。